

常設展示室に「奥の細道と千住」 コーナーがオープンしました

荒川ふるさと 文化館だより



「俳聖の火」が灯された行灯 (左)



新設された「奥の細道と千住」コーナー



千住旅立ち3Dアートと西川荒川区長 (右)
・小川大垣市長 (左)、おがつきい



「奥の細道と千住」コーナーでの展示解説

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登 録 (01)0035号

令和元年は、元禄2年(一六八九)春に松尾芭蕉が奥の細道へ旅立ってから、三三〇年目に当たります。荒川区では、8月24日に当館を会場として、奥の細道旅立ち330周年記念セレモニーを行いました。奥の細道結びの地である大垣市から、小川敏大垣市長がお祝いに駆けつけて下さったほか、約120人が参加し、にぎやかな式典となりました。

セレモニーでは、奥の細道サミット加盟都市が共同で行っている奥の細道紀行330年記念事業として、大垣市マスコットキヤラクターおがつきいと水の都おおがき親善大使も参加して、「俳聖の火」分火式が行われました。松尾芭蕉の生誕の地・三重県伊賀市で採火された火を、日光路・奥州路・出羽路・北陸路と繋ぎ、灯していくものです。330年記念事業実行委員長でもある大垣市長から荒川区長への親書の贈呈と、荒川区長が署名した決意表明文の読み上げが行われ、互いに奥の細道の魅力を積極的に発信していくことが宣言されました。

その後は、恒例の「芭蕉の大橋渡り」に出席。芭蕉の旅姿・浴衣姿の大勢の参加者は千住大橋を渡り、奥の細道矢立初めの地をアピールしました。

さて、セレモニーでは、荒川ふるさと文化館の常設展示の「奥の細道と千住」の披露も行われました。荒川区の歴史としての奥の細道を知ることができるよう、芭蕉と奥の細道、芭蕉と千住の関係などを解説したパネルと、奥の細道の旅程図を設置しています。

オープニング記念として大垣市奥の細道むすびの地記念館より借用した貴重な史料「絵入りおくの細道」、館蔵の「おくのほそ道」を並べて展示し、矢立初めと結びの地のつながりを感じさせる構成となりました。今後、このコーナーでは、奥の細道や松尾芭蕉に関する史料を定期的に展示替えをしていく予定です。

併設の南千住図書館の「奥の細道コーナー」もリニューアルし、充実しました。奥の細道に関して、知りたいことをすぐに調べることができます。また館の正面入口では千住旅立ち3Dアートがお出迎え。芭蕉の旅立ちの場面に居合わせたかのように、一緒に記念撮影ができます。

荒川区の新しい奥の細道スポットにぜひお越しください。

文化財の道標②

地域に守られてきた石仏

袈裟塚耳無不動

荒川区役所近く、明治通り沿いの小さな森（荒川三丁目22）に、区指定有形民俗文化財の石のお不動さんが安置されているのをご存知でしょうか。

造形的に髪が耳を隠しているだけなのですが、左耳が見えないことから耳無不動と呼ばれています（写真1）。
仙光院から庚申塚にお引越し 耳無不動



写真1 袈裟塚耳無不動と新設した指定文化財標柱（右）

は、もともと明治通りの北側、仙光院（廃寺、荒川二丁目8）の参道にあった袈裟塚の上にありましたが、明治29年（一八九六）、仙光院の鎮守の三峰神社とともに、庚申塚と呼ばれていた現在地に移転しました。庚申塚の呼び名の通り、現在も江戸時代の庚申塔（区指定有形民俗文化財）が3基立っています（写真2）。中でも慶安5年（二六五二）銘には、庚申の本尊「青面金剛」の名が刻まれており、江戸での青面金剛の文字の初見として有名です。

袈裟塚耳無不動伝説 耳無不動は、山東京伝の黄表紙「三河島御不動記」のモデルとされ、明治時代には歌舞伎の狂言「臯月晴上野朝風」という演目の四幕目の「三河島不動前」に登場する有名な不動さんです。また、地元には、仙光院開山光慧と許嫁だった吉原の遊女紅山との悲恋と非業の死の伝説が伝わっています（『三河島町郷土史』昭和7年（一九三二））。悪疾に冒された光慧が不動明王の夢告を受け、自分の法衣を埋めて袈裟塚とし、五穀豊穰・往來安全を祈願して、塚の上に石の不動を安置したと伝えま

ます。実際に台座は道標になっています。耳無不動のご利益 耳無不動は、祈願すると花柳病に効き目があると言われ、古くから吉原等の花柳界関係者の信仰を集めてきました。また、耳の病にご利益ありとして、地域の人はもちろん、区外からも篤い信仰を集めてきました。病氣平癒をご祈願してご利益があったら、お椀に穴を開けて（耳が通るの意）奉納するのが慣例でしたが、これが転じて、今日では祈願の際に穴を開

けていないお椀を納める、さらに陶器の茶碗を納める事例が多く見られるようになりました。地域に守られてきた耳無不動 この春、耳無不動の近くにお住まいの三峰講の佐藤裕子さんから、耳無不動の指定文化財標柱が倒れていると、連絡を受けました。昔から地元のみなさんが、耳無不動、三峰神社を身近なものとしてお参りし、清掃や樹木の手入れをしてきたからこそ、気づかれたのです。耳無不動の標柱は、平成2年（一九九〇）度に設置したもので、現地確認をしたところ、経年劣化で腐食が進み、根元から折れていました。佐藤さん、講元の影山馨さんにも立ち会って頂き、7月に新たな標柱を設置しました。

区内各地域には、たくさん文化財があり、指定文化財標柱や史跡文化財説明板を設置しています。これからも地元のみなさんと共に守っていきたいと思います。お気づきのことがありましたら、荒川ふるさと文化館にご一報ください。〈野尻かおる〉



写真2 区指定有形民俗文化財の庚申塔群3基

収蔵庫のイッピン!

九品目 懐かしの

五輪東京大会聖火リレーのスナップ

2020五輪聖火リレー 2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックまで1年を切り、大会前121日間に渡って47都道府県をまわる聖火リレーも準備が進められています。前回の聖火リレーと同様、荒川区は東京都を巡回するルートに含まれています。大会直前の2020年7月20日(東京会場11日目)に葛飾区↓江戸川区↓墨田区↓荒川区とまわり、荒川総合スポーツセンター隣の南千住野球場がセレブレーション会場となる予定です。聖火ランナーの姿を再び荒川区で見ることが出来る貴重な機会です。

コツ通りを走る聖火ランナー さて、今回ご紹介するのは、今から55年前の昭和39年(一九六四)に開催された東京オリンピックの聖火ランナーを、南千住のコツ通り商店街で迎えている時の写真です。寄贈者兼撮影者の今野國男さんは、当時荒川区に在住していました。現在は宮城県石巻市にお住まいです。石巻市総合運動公園には、当時使用された聖火台が復興のシンボルとして2019年5月まで展示されていました。距離はありながら不思議な縁を感じます。寄贈された写真は計4枚。いずれも荒川

区内中継地点である君野園茶店前(南千住五丁目)で今野さんが撮影したもので、沿道を埋め尽くす観覧者の頭越しからカメラを構えたようです。写真1は、アーケードに飾られた色とりどりの万国旗と、左端に「東京大会(荒川区) 聖火リレー隊」の横断幕の一部が見てとれます。また、中央にはベレー帽とブレザーの団が一列に並んでいる様子が写っています。

写真2は、選手の交代式でしょうか。横断幕前には対面する日の丸姿のランナーが6名ほど見えます。聖火トーチから出る白い煙が、辺り一面にもくもくと充満する臨場感が伝わってきます。当時使用されたトーチはステンレス製で、重さ1.2kgでした。ちようど空の一升瓶と同じ位の重さです。沿道に集まった人々 『オリンピック東京大会の警察記録』(警視庁、一九六四)によれば、荒川区

は千住大橋南詰から汨橋交差点までの1.1kmを2区間に分け、総勢48人の聖火ランナーで走りました。また、「10時30分ごろから団体観覧者27校の生徒児童があらかじめ指定した場所に徐々に集合を始めたが、聖火通過の時間がちょうど12時を過ぎた昼休み時間に当たっていたため、沿道付近の会社、工場等の従業員が一せいに殺到し、最高時にはおお



写真1



写真2

むね4万名に達した。」と書かれています。写真の出入を裏付けるような、こったがえした状況だったことが分ります。カラー写真の普及と白黒写真 当稿でお見せできず残念なのですが、実はこの写真はカラー写真で、当時は珍しいものでした。カラーフィルムは戦前からありましたが、一枚あたりの値段も高く、現像にも時間がかかるため、一般には白黒フィルムが主流でした。それだけにカラーで撮られたこの写真から、今野さんのイベントに対する意気込みが感じられます。懐かしの五輪東京大会聖火リレーの写真 を紐解いてみると、遠くギリシャから運ばれた聖火へ注がれる南千住の人々の熱いまなざしを、改めて感じられるのではないのでしょうか。 <高柳吟音>



写真1 モリタヤ酒店
軒先のホーロー看板



写真2 昭和14年(1939)のモリタヤ
酒店、右奥の壁に「塩(塩)」
の看板がみえる



写真3 廃業した酒店の店先に残る
看板

街角の
しるし

⑦
まだ会える! 南千住に
残るホーロー看板

「塩」のホーロー看板を各1枚ご寄贈いただいた。この看板が店に掲げられてきた理由は、2品をめぐる歴史が握っている。

この2品をつなぐキーワードは、国が特定物資の生産、流通、販売を独占管理する「専売制」という制度である。たばこは、日清戦争後の明治31年(一八九八)に、財政収入を増やすため、原料の葉たばこが専売となり、日露戦争時(同37年)にはその製造から販売まで専売となった。塩も同じ理由で同38年に専売となった。そのため、制

看板のある景色
モリタヤ酒店(南千住六丁目)の店先に吊された金属製の看板(写真1)。いわゆるホーロー看板である。今年7月にモリタヤ酒店の3代目である森田繁さんから、「たばこ」と

度が完全に廃止される平成9年(一九九七)まで、販売店は限られていた。森田さんいわく、これらのホーロー看板は、日本専売公社や後続の日本たばこ産業株式会社から5〜10年に一度、販売認可を受けている店へ配付されていたという。古写真を見ると(写真2)、酒の木製看板や調味料、清涼飲料水のホーロー看板と共に、「鹽」の看板も、販売店の目印として店先に掲示されていたことがわかる。専売品の看板は街の酒店の他に、日用品店や食料品店で掲げられていたため、街で見かけることは珍しいことではなかった。

南千住の酒店と街並み 販売していることを示すホーロー看板は、専売制度廃止と同時にその役割を終えたが、街で看板を見かけなくなった理由はそれだけではない。例えば、南千住の街角から姿を消していった様子を再び森田さんに聞いてみた。明治44年に大阪で創業したモリタヤ酒店は、大正15年(一九二六)に東京に転居した。当時、千住製絨所や千住板紙製造所の工場や社宅

がある一方で酒店がなかったため、客足を見込んで店を構えたという。その後、周囲に自営の工場も増え、森田さんの子供時代まで店先で酒を楽しむ街の人の姿が見られた。活気あふれる南千住には15年ほど前まで約40店の酒店があった。だが、平成18年の酒類販売の完全自由化にともない競争相手が増え、今では9店に減った。こうした個人商店の減少も看板を見かけなくなった要因だ。それでも、店先には今も数枚の看板が吊るされていて(写真1)、長い時間の中で「街の見慣れた景色」になっている。例えば、荒川総合スポーツセンター付近には、看板の配付年月「84-09」(1984年9月)とスポンサー名入りの「塩」のホーロー看板が掲げられている(写真3)。ここは元酒店の店先で、看板は亡くなったご主人の希望で廃業した今も残っているという。街に残るホーロー看板は単なる看板でなく、かつてそこに何があったかも伝えてくれるようだ。見かけたときには、街の変化に思いをはせてみてはいかがだろうか。

(岡田伊代)



町屋四丁目実揚遺跡（以下、「実揚遺跡」）で、9度目の本調査が平成31年3月18日（4月26日）に行われました。調査面積は約270㎡、遺物は土器の破片などを含めて約五千点を数えます。弥生時代終末から近世までの遺物が見つかっていますが、土師器と呼ばれる土器が多く出土しており、古墳時代を中心とした遺跡です。今回は、本調査で発見されたこの時代の、井戸枠がない素掘りの井戸を紹介します。

生命に欠かせない水 荒川ふるさと文化館にはよく小学生が見学に訪れます。展示解説では「みんな生きるためには水は欠かせないよね？ 昔の人は水をどう確保していただろう？」と聞きながら、実揚遺跡の井戸の話します（『荒川ふるさと文化館だより』27号参照）。

この遺跡の特徴の一つに、井戸状の遺構が多く見つかることがあるからです。低地の中にある微高地という立地で、比較的浅い位置から水が出ます。隅田川右岸に位置し、当時の川の流路や氾濫域はたどれてはいませんが、川が今よりも近い場所

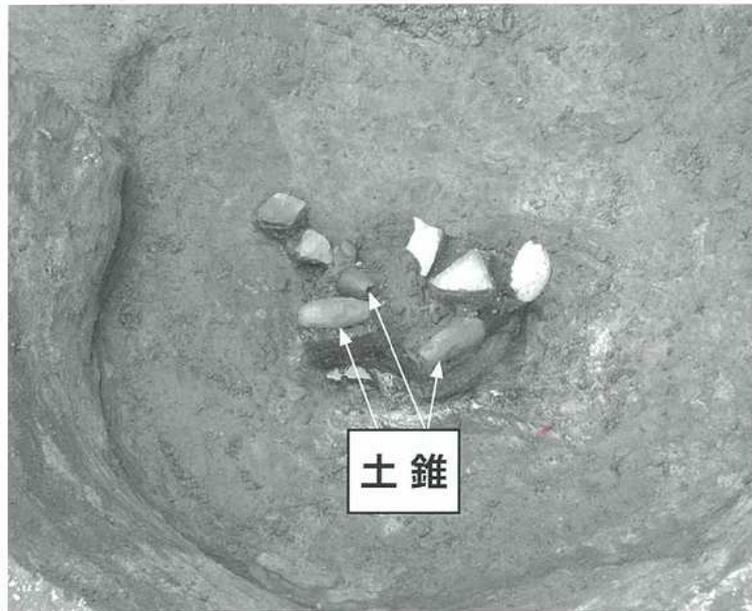


写真1

あつたと考えられます。祭祀と関連する遺跡 井戸には、水の確保という現実的な生活以外に、古代の人びとの精神世界に深い関わりがあります。実揚遺跡は、これまで見つかった遺物や研究成果から、祭祀遺跡の性格をもつとも考えられています。常設展示室にある井戸枠付きの井戸からは、祭祀のためか故意に穴をあけたり、欠いたりした土師器が見つかり、井戸祭祀との関連が窺えます。

今回発見された素掘りの井戸からも祭祀に関連しているのではないかと思われる特徴が見つかった土錐。その特徴とは土錐が3点

見つけたこと（写真1）。もう一つの井戸からは、破片の状態では、高坏の脚部が数点出土し（写真2）、いずれも人為的に埋められたものと推定され、何らかの祭祀がここで行われた可能性があります。

さて、土錐とは、漁業をする際に付ける土製の重りです。沈子とも呼ばれます。近くで漁をしていたことがわかる資料の一つです。今回の調査では井戸以外にも土錐が見つかっており、当時、町屋辺りに住む人びとも生業のひとつとして漁をしていたことがわかります。

遺跡からは溝状の遺構や周溝は検出されるものの、明確な建物の跡などは見つかっておらず、集落の跡や墓も確認されていません。しかしながら、井戸が多く見つかるという事実は、この地域に人びとが定住していたことを示しているといえるでしょう。来年には報告書も刊行の予定です。

（八代和香子）



写真2

あらかわ
タイムトンネル 29

町奉行所同心と

七面明神の鏡

延命院の七面明神 七面明神は日蓮宗延命院（西日暮里三丁目）の七面堂に安置されている。木造七面明神立像という名称で区の登録文化財にもなっている（非公開）。

七面明神は、法華経を守護する女神だが、由緒によれば、万治3年（一六六〇）、身延山久遠寺の鎮守、七面山から、日長上人が勧請したといわれる。また、慶安元年（一六四八）、四代將軍徳川家綱から、於樂方の懐妊と安産を祈禱して、家綱が生まれたことから信仰を寄せ、お堂を寄進したとも伝えられる。江戸時代の初期から江戸名所の一つとしてよく知られ、江戸城大奥関係者のみならず、多くの参詣者を集めた。よって奉納物も多い（写真2）。

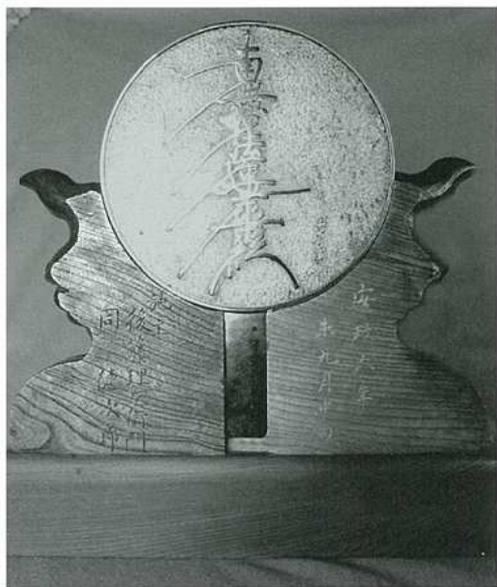


写真1 「南無妙法蓮華経」文字入り柄鏡と台

さて延命院の七面明神は、宮殿型厨子の中に納められているのだが、厨子の前に柄鏡が一面置かれている（非公開。写真1）。**鏡の製作者** 鏡の裏には、髭題目と呼ばれる題目（南無妙法蓮華経）が浮き出るように鑄造されており、磨かれて輝いている。その右脇に、小さく「天下一若狭守」とあるのが、この鏡の製作者である。京都の人物のようで、江戸時代全般に作例があるようだが（香取秀真『鑄物師の話』）、この鏡は形からいって江戸時代後半のものと思われる。「天下一」銘は、織田信長以来、職人の間で広く用いられてきたが、明和3年（一七六六）〜安永元年（一七七二）の間、使用を禁止されていたので、それ以降造られたものだろう。

なお、菓子満氏（区指定無形文化財保持者〈鑄造〉。区文化財保護審議会委員）のご教示によると、当鏡は、これ一点のために型を作って鑄造された特注品なのだそうだ。題目の文字入り柄鏡は、國學院大学博物館所蔵の2点が知られているが（『柄鏡大鑑』『服部和彦氏寄贈資料図録』I）、いずれも題目の文字の髭の伸び方や地紋が異なる。**鏡の奉納者** 鏡は台の上に置かれていて、多くの場合がそうであるように、この台の裏には奉納者の名前が刻まれ、朱字が書かれている。読んでみると、「安政六年」「未九月中旬」、「施主」「後藤理左衛門」「同徳次郎」とある。

この二人は誰か？ 彼らは恐らく南町奉行所の同心である（元治元年〜一八六四）「南町奉行組与力・同心氏名」〔原胤昭旧蔵資

料調査報告書』（4）、千代田区教育委員会、二〇一一年）。文久2年（一八六二）の八丁堀の切絵図をみると、「後藤理左衛門」「同徳二郎」「同 幸二郎」とあるので二人は家族だろう（「八丁堀再見絵図」〈同前〉）。**鏡の謎** とところで、貞享4年（一六八七）刊行の名所案内「古郷帰の江戸咄」には延命院の七面明神について次のような記述がある。

七面明神に願いがあれば、神前に面を七つ掛けると霊験あらたかでご利益がある。また鏡を七つ掛けることもあるそうだ。

もとより鏡は古来呪術的な祭祀具であり、神様に奉納されること自体、珍しいことではない。勿論、この鏡と「古郷帰の江戸咄」の記述との関連性は不明だ。だが、これま
でほとんど知られていない、町奉行所与力・同心の信仰を映し出しており、貴重な鏡であることは間違いない。〈亀川泰照〉



写真2 「七面大天女」奉納額